

報告

看護の概念形成を目的とした初期看護実習の展開方法

嘉手苅英子¹⁾ 上原綾子¹⁾ 名城一枝¹⁾ 大田貞子¹⁾

金城 忍¹⁾ 上江洲貴乃¹⁾ 安里葉子¹⁾

本稿は、看護学の基幹概念を学び終えた1年次前期の最終の週に行っている基礎看護実習の展開方法について論述した。基礎看護実習は、看護の概念の広がりや深まりを目的とした初期看護実習で、看護実践の行なわれている場での3日間の実習と2日間の学内での振り返り学習および報告会で構成されている。今年度、実習目的にそって実習施設を8施設から16施設に増やした。その結果、あらゆる健康状態と発達段階にある人々を対象とし、様々な生活の場で生老病死に関わるといふ看護実践の特徴がより浮き彫りになった。実習は、実習目的と学生の学習段階を考慮し、観察が深まりかかわりが発展するよう同一施設に配置している。実習後の振り返り学習と実習報告会は、学びの共有と論理能力を鍛えることを目的としている。振り返り学習は数名毎のグループワークで行い、実習で印象に残った場面をカードに記入し、場面の意味を読み取って場面間のつながりを考え、全員のカードを構造図に表している。全過程を通して看護に関する間接的体験を増やし体験の中の共通性や相異性に注目していくことから、看護の概念の広がりや深まりが期待できる。また、このワークでは帰納的思考と演繹的思考を意識的に働かせることが求められる。実習は学生が5感を通して現場からの刺激を直接受け取る体験をするという特徴がある。学生の学習段階と現場での対象者の状況を考慮して、双方にとって安全で効果的な体験ができるためには、施設側と教育側の調整と協力が不可欠である。

キーワード：初期看護実習、教育方法、看護の概念、体験の共有、論理能力

1. はじめに

看護基礎教育では、専門科目を学ぶ前あるいは学び始めた段階で行う実習が広く実施されている。実習の目的としては、看護の対象や生活の場、看護活動を理解することや、コミュニケーションの学習、専門教育への動機付け、職業人としての態度の向上など様々である。入学後の早い段階に病院等で行う実習は、アーリー・エクスポージャー（早期体験学習）として、平成7年に当時の文部省が示した21世紀の医療者の育成に関する施策¹⁾の中でも示されており、医学・歯学・薬学教育に導入すべきカリキュラム改善、教育方法の改善として推奨されている。早期体験学習の展開方法については、各大学でさまざまな取り組みが行なわれている²⁾。

本学では早期体験実習に相当するものとして、看護学の基幹概念を学び終えた1年次前期の最後の週に行っている基礎看護実習の科目がある。この実習は、具体的な看護現象を通して看護の対象や活動の場の広がりや看護の概念を理解することを目的としている。つまり、実習を通して、「いろいろ看護がある」という広がりや、「現象はいろいろ違うけれど本質は同じ」という深まりの2方向の学習を含んでいる。開学5年目を迎えた今年度(平成15年)、これまでの基礎看護実習を振り返って実

習の必要性を再確認した上で、展開方法を見直した。基礎看護実習は80名の学生が同じ期間に一齐に行う実習である。80名が数名前後のグループに分かれてそれぞれ異なる施設で3日間実習し、その後の2日間は学内でのまとめと実習報告会を行っている。今年度の見直しで従来と比べて大きく異なった点として、実習施設が新しく8か所増えて16か所になったことがあげられる。これはこの実習がなぜ必要なのかを問い返す中で、看護の概念の広がりや深まりという実習の目的がより明確になり、実習施設を増やす必要性が確認できたからである。その結果、従来からフィールドとしていた肢体不自由児施設および重度心身障害児(者)施設や介護老人福祉施設、総合病院の外来、訪問看護ステーションなどの他、新たに離島の3施設(病院、介護老人福祉施設、自治体)や助産所、緩和ケア病棟、検診センター、宅老所などが加わった。

今年度の実習を終えた段階で、看護の概念形成を目的とした初期看護実習の展開方法が定まり、今後の課題が明らかになった。看護学教育において看護実習は重要な授業形態であり、その展開方法の検討は看護学教育上意義があると考えられる。そこで本稿では今年度の実習を振り返り、本学における基礎看護実習の展開方法とその特徴について論述する。

なお、論文中に取り上げた記録については、論文の趣

1) 沖縄県立看護大学

旨と記録の取り上げ方を説明した上で個々の学生の承諾を得た。

2. 教育目的からみた実習施設の位置づけ

基礎看護実習は、「看護実践の場に臨み、看護を必要としている人々の様子やそれを支えている人々の働きを観察し、看護の行なわれている場や対象の広がりおよび看護とは何かを、具体的な事実を通して理解する」ことを目的とし、実習施設はこれに照らして選択している。今年度の実習施設16か所がこの目的からみて、それぞれどのように位置づけられるのかをみってみる。

表1は、各実習施設が担っている主な看護の機能を示したものである。例えば、助産所は助産師が助産または妊婦、じょく婦もしくは新生児の保健指導をなすことを目的に開業した施設である（医療法2条および保健法3条より）。実際には、助産を中心とした活動の中で、生まれてくる児の父親や同胞など家族への指導・教育、思春期や青年期を対象とした性教育なども行なっている。妊娠分娩に留まらず、家族関係の形成や人間の尊重など次の世代を育むための営みをさまざまな形で支援していることから、その活動に含まれる主な看護の機能を「次の世代を育む営みを支える」と捉えた。検診センターでは、職場や地域検診、個人の健康診断が中心に行なわ

れ、疾病の早期発見や健康の保持・増進を担っている。そこで、その活動が担っている主な看護の機能を、「現在の健康状態を把握し、生活の見直しや受療行動を支援する」ととらえた。同様に、他施設の活動の特徴についても、その施設が担っている主な看護の機能は何かという観点から捉え、表現した。このように実習施設の主な看護の機能を概観すると、看護が生活の様々な場で人間の生老病死の諸側面に関わる仕事であることがわかる。

次に、各々の実習施設がどのような人々を対象としているのかをしてみる。図1は、各実習施設が対象としている人々の発達段階（ライフステージ）と健康の段階を示したものである。図の横軸はその施設が対象としている人々の発達段階を、たて軸は健康の段階を示しており、実習施設毎に該当する範囲を矢印で表した。健康の段階は、発達段階に応じた「その年齢の健康な状態」から「死」までを連続線上でとらえている。例えば、肢体不自由児施設は小児期にあるこどもを対象としており、そのこども達は何らかの障害をもち療育を必要としている。そこで、対象とする健康の段階は、全体の中から「その年齢の健康な段階」と「死の脅かしが前面に出ている段階」を除いたところだと判断し、図中に施設の種類と矢印を記入した。他の施設についても同様に判断し記入した結果が図1である。図1において太字で示した実習施設は、今年度が

表1 実習施設が担っている主な看護の機能

施設の区分	施設の種類	主な看護の機能
医療関連施設	助産院	次の世代を育む営みを支える
	検診センター	現在の健康状態を把握し、生活の見直しや受療行動を援助する
	病院	医療を受けている人々の回復過程を援助する
	緩和ケア病棟	終末期にある人々がその人らしく生をまっとうできるように、家族と共に支える
小児関連施設	肢体不自由児施設	障害をもって生きる子供の成長と生活を支える
	重度心身障害児(者)施設	
老年関連施設	老人保健施設	自立した生活が困難な老人の、その人らしい生き方を生活の場で支える
	痴呆老人対応グループホーム	
	特別養護老人ホーム	
	養護老人ホーム	
	宅老所	
訪問看護施設	訪問看護ステーション	障害を持ち在宅で生活する人々を支える
自治体	町役場	地域および、地域で生活する人々の健康を守る

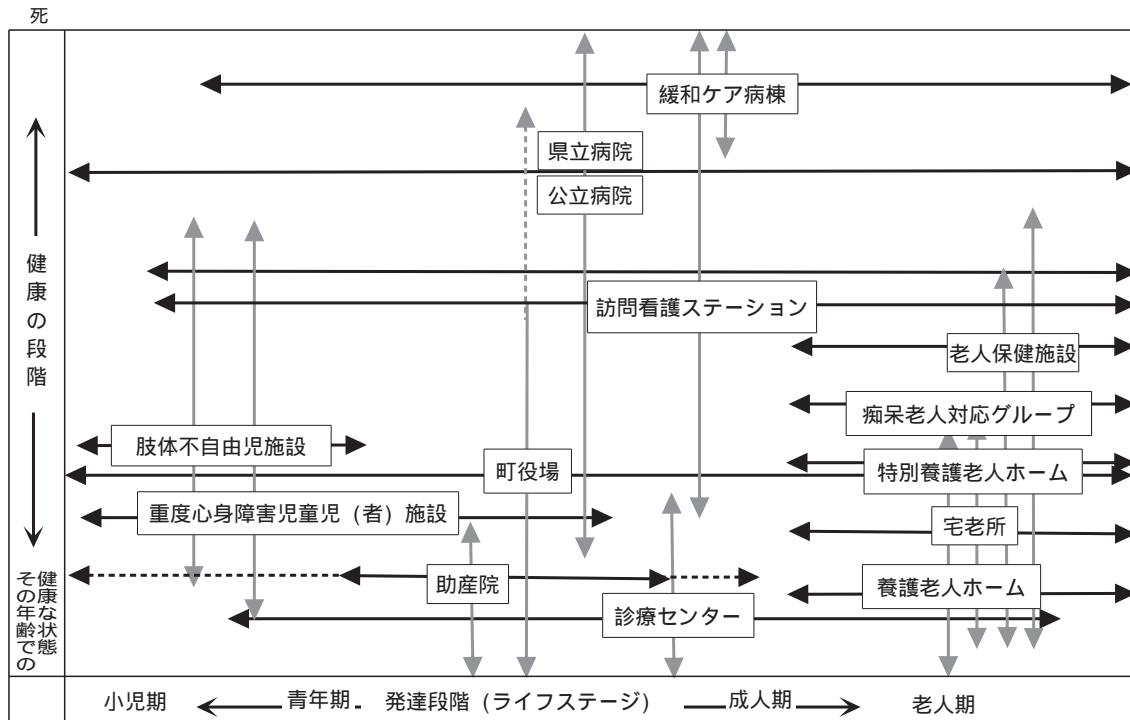


図1. 実習施設毎の対象の発達段階と健康の段階

←→ 対象としている範囲
太字は平成15年度からの実習施設

ら実習フィールドに加えたもので、16施設揃ったところで、胎児・新生児期から高齢者まで、そして健康な状態からターミナル期にある人までと、発達段階と健康の段階をほぼ網羅しており、看護があらゆる人々を対象としていることがわかる。現在の実習施設だけでは不十分な領域は、思春期から青年期、壮年期、健康な人々を対象とした看護活動である。これに相当する施設としては小中高校の保健室や産業保健領域の保健管理室などがあり、初期看護実習の段階でどこまで広げていけるのかを含めて今後の検討課題である。

3. 同一施設への実習配置とそのねらい

これらの実習施設で、学生達は2～13名のグループに分かれて3日間同じ施設で実習を行なう。学生数のばらつきは施設の受け入れ可能人数によるものである。学生が実習でどのような体験をするかは実習施設の種類によって異なる。例えば、介護老人福祉施設や肢体不自由児施設など生活の場である施設では日常生活に関するケア体験が多く、医療機関では診療に伴う体験が多い。検診センターや町役場や助産院では、保健指導や健康教育に関する活動の見学や参加の機会が他施設に比べて圧倒的に多い。看護現象の多様性に直接触れる機会を広げるという観点からは、個々の学生が複数の施設で実習をする方法が望ましい。それにもかかわらず同じ施設に配置しているのは、同一の施設で実習することによって観察の深まりやかかわりの発展を期待しているからである。

初期看護実習の段階の学生は現場での体験がほとんどないことから、現場の様々な状況を目にした時にまずはその表面に注目する傾向があり、看護者の意図や看護者と対象者の相互関係をとらえることが容易ではない。例えば、体の動きの不自由な老人を見てすぐに手を貸してしまい施設のスタッフに見守るようにと助言を受けたり、忙しく動いている外来の看護師を見て、事務的なことをしているだけと見えたりなどである。援助を受けているだけと思っていた対象が別の場面では逆に他者を手助けしているのに気づくなどして、集団の中の相互関係や人間の能力が表面に見えるものだけではないとわかることがある。このように、部分から全体へそして事実の表面からその意味へと見え方が変化することは、看護の対象や看護状況の内部構造が見えてくることを意味しており、観察が深まったことを示している。

もうひとつはかかわりの発展である。かかわりの手段である対象とのコミュニケーションは、初期段階の実習において多くの学生が困難と感ずることのひとつである。始めは断片的な会話で終わっていた学生が、なぜ会話が続かないのかを振り返り自分の関心で話を進めていたことに気づくことがよくある。その後、対象の関心事に注目し、それを話題にしたことで楽しいと思える会話ができるようになったというようなかかわりの変化が、実習期間中に生じる。これらの出来事は、対象の状況を見ながら相互関係を成立させ発展させるためには、かかわりを重ねることのできる時間と機会が必要であることを示唆

している。

4. '実習体験の共有'と'論理能力を高める'を目的とした振り返り学習と実習報告会

3日間の実習に引き続く2日間、実習体験をもとに学内で振り返り学習および実習報告会を行っている。その目的の1つは、'実習での学びの共有'である。学生は、実習で現実の看護実践のごく一部分に接するに過ぎない。また、同じような場面に遭遇しても学生によって注目する事実は異なり、感じたり考えたりすることは同じではない。そこで、互いに学んだことを共有することによって間接的な体験を広げることができ、思考を深めることができると考える。振り返り学習および全体報告会の2つ目の目的は、'論理能力を高める'ことである。実習での学びを共有するために自分の体験を想起・再構成して表現したり、他者の表現からその内容を汲み取ったりして体験の意味を考えるプロセスでは、帰納的思考と演繹的思考が意識的に繰り返される。これは庄司が述べている認識の発展のありかた、すなわち、認識ののぼりおり³⁾を駆使することであり、論理能力を高めることになると考える。

振り返り学習は、2～3施設の学生で構成する5～7人のグループで行っている。まず、実習で印象に残った看護場面を、その状況が読み手に描けるよう場面のプロセスにそってカードに記述する。1つのカードには1場面を書き、できるだけ違うタイプの場面を選んで1人3枚作成する。全員でカードを読み上げながらその状況を思い描き、記述が不十分な場合は必要に応じて加筆修正してカードを完成する。カードは約8cm×10cmの大きさ

で、その中に読める大きさの文字で記入する。限られた文字数で記述するには情報を取捨選択しなければならず、その場面を構成している不可欠な事実が何かを考えると求められる。カードには氏名と場面の他に、その場面が印象に残った理由といつ体験したかを記入し、場面を吟味する時の手がかりにしている。看護場面を記述したカードの例を図2に示す。

この場面は町役場で実習した学生(上江洲希)の体験である。「60代～80代の高齢者の方を対象にして、老人福祉センターで行われている操体法を高齢者の方と一緒に体験することができた。操体法の踊りの中で輪になることがあった。踊りの中で隣の人と手をつなぎ、上にあげる動作があったが、私の隣のおばあちゃんは、小柄な

カードの 記入方法	氏名(実習施設、実習何日目)
	理由: この場面がなぜ印象に残ったか
	場面: 場面の状況を読み手が思い描けるよう、状況のプロセスに沿って記述する

上江洲 希 (**町役場・2日目・午後)
理由: 肌と肌が触れ合ったことで、相手の気持ちが伝わってきたから
場面: 60代～80代の高齢者の方を対象にして、老人福祉センターで行われている操体法を高齢者の方と一緒に体験することができた。操体法の踊りの中で輪になることがあった。踊りの中で隣の人と手をつなぎ、上にあげる動作があったが、私の隣のおばあちゃんは、小柄なのに、私は手をひっぱられているように感じた。このことから、おばあちゃんが張り切って操体法に参加し、楽しんでいるように唇をたし、私も逆におばあちゃんから元気をもらったので、楽しんで何事にも取り組む姿勢は相手にまで影響を与えるとわかった。

図2. 看護場面のカードと記入例(図3の網掛けで示したカード)

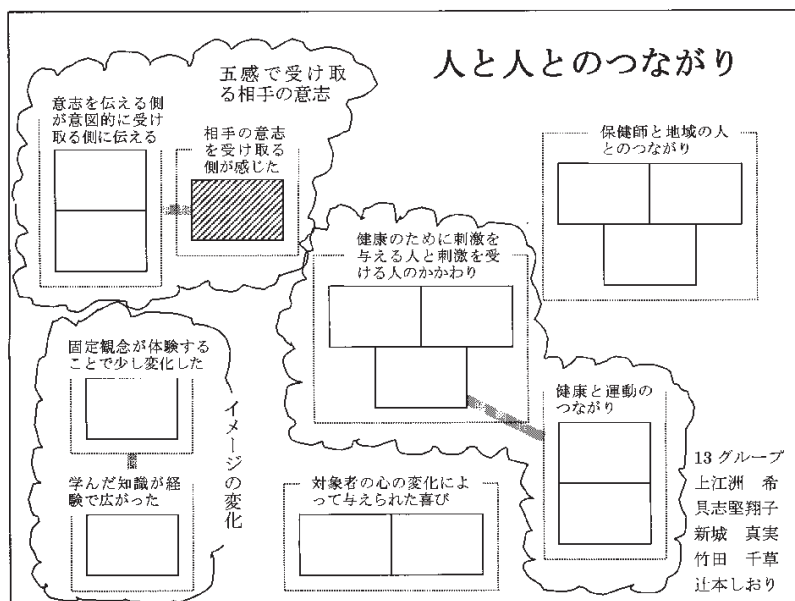


図3. 構造図の例(検診センター・町役場グループ)

図中の □ はカードを表す
 ◻のカードを図2に示す

のに、私は手をひっぱられているように感じた。このことから、おばあちゃんが張り切って操体法に参加し、楽しんでいるように思え、私も逆に、おばあちゃんから元気をもらったので、楽しんで何事にも取り組む姿勢は相手にまで影響を与えるとわかった。」この場面で学生は、一緒に体を動かしている時に、つないでいた手の動かし方から相手の気持ちを感じ取っている。さらにそれだけでなく、その気持ちを感じ取った自分も同じ気持ちになったことから、人間の思いが行動を介して他者に伝わって影響を与えたとの理解を深めている。このように状況を想起し、読み手が描けるように記述することによって、書き手は自分の体験の意味を確認し、読み手は間接的な体験を広げることができる。

すべてのカードが完成したら、それぞれの場面の意味を読み取り、意味が似ているカードをグループにし、似た性質を文に表してそのグループの表札とする。何層かのグループができるまでこれを繰り返した後、体験全体のつながりを考えながら模造紙に全てのカードを配置する。そして、カードやグループ間の関係を枠や線で表しながら、構造図を作成する。構造図を見渡して体験全体から学んだ内容を考え、それを大表札として表記したところで構造図の完成となる。

図3は、検診センターと町役場の実習グループが完成した構造図の概略である⁴⁾。図中の四角は個別場面を記述したカードを示している。実際の構造図ではいくつかの絵が挿入されている。このグループの大見出しは「人と人とのつながり」で、大表札につながる表札のキーワードは関わり、イメージの変化、健康などであった。この2つの実習施設では、学生自身や保健師、その他の医療者と対象者との関係から学ぶ機会が多くみられた。対象者のほとんどが健康な人で、コミュニケーションを介した保健指導や教育の場面に多く立ち会っており、その体験が表札や大表札に反映されていた。その他のグループの大表札には、「人と人とのつながり」のように人間関係に焦点が当たっているものの他、「患者の意思を尊重しサポートしていく看護（訪問看護ステーション・緩和ケア病棟・助産院グループ）」などのように対象者の主体性に注目したもの、「先入観をもちず対象者を観察し、洞察力を働かせ対応することが大切!!（介護老人福祉施設グループ）」などのように観察の重要性を強調したものの、「安心と尊厳のある生活のお手伝い（宅老所・痴呆老人対応グループホームグループ）」のように看護の働きに注目したものなどがあつた。大表札の背後にはいずれもそれを導き出した学生の直接的な体験があり、強調点の相違にはどのような体験をしたのかが反映されていると思われた。

実習報告はこれらの構造図を用いてグループ毎に行なつた。実習報告会を通して学生は間接的な体験を広げ、他との比較において自分が観察したり体験したりした事実の特徴を知り、さらに看護現象に共通する性質に注目し

ていた。例えば、対象者とのコミュニケーションの難しさや重要性については、多くのグループが発表の中で言及していた。その具体的な出来事は、言語障害のための聞き取りにくさや勘違いによる誤解、表現技術の未熟さなど、様々であった。実習報告会終了後のレポートには、「出来事は違うが大切なことは同じ」や「同じ出来事だけれどその意味は違う」という相反する記述が見られた。これは、論理的思考を働かせることによって看護現象の中の類似性や相異性が見えてきたことであり、看護現象を構造的に見つめ始めたことを意味している。

構造図を作成する方法は、事実に語らせながらその中の「似た感じ」に注目して事実間の関係を見出そうとするKJ法⁵⁾に似ている。KJ法では事実を拾い上げたり意味内容を読み取ったりする際に、何らかの概念枠組みに照らすということを敢えてしない。それに対して振り返り学習の場合は、看護者として何を学んだのかという観点から場面の意味内容を読み取るところに違いがある。

創造力開発の方法として、ラベルを用いて知識の発信・交流と生産を目的としたラベルワークという方法（技術）が林によって開発され⁶⁾、看護教育の分野でも関心が持たれてきている。石塚ら⁷⁾⁸⁾は基礎看護学実習の毎日の記録と実習終了後のまとめにこのラベルワークを取り入れ、学生同士の学び合いと体験の意味づけを促すことができたとの報告をしている。実習という授業形態は体験を中心としているので、体験のみにとどめずいかにその意味をつかませるかが課題となっており、教育方法上の工夫が求められている。

5. 初期看護実習における実習指導者の役割

初期看護実習において実習指導者は、学生が体験できる機会、中でもできるだけ当事者としてかかわる機会をつくるという役割を担っている。実習の大きな特徴として、学生が五感を通して現場からの刺激を受け取れることがある。基礎看護実習は、基本的には見学実習であるが、常識的な判断や行動で対処できる状況や、スタッフや指導者の見守りの中で実施が可能なケア行動については、できるだけ体験することを期待している。学生の力量に見合った体験ができるためには、教育目的や学習段階を施設側の指導者に明確に伝えるための事前調整が不可欠である。先に見たように、実習フィールドとなった施設はそれぞれ設置目的や対象、活動が異なり日課も様々である。それぞれの施設で実習の目的・目標を実現するためにどのような体験ができるかを検討し、実習内容や日程を施設毎に違うものにしていく。体験の種類や方法は施設の状況や実習指導教員の参加の条件によって決められている。例えば、安定した状態の対象者で日常的に繰り返されるケアについては、スタッフの視野の下で段階的に実施させてもらえるようにし、そのような状況設定が困難な場合は見学に留めるなどである。また、実習の開始時間については、施設の業務に支障が少なく実習する

学生にとっても効果的である時刻を検討し、7時30分から9時30分までの間に設定し、各々異なる実習日程となっている。

次に、かかわりの当事者になれるよう学生を後押しすることについて述べる。臨地実習は、看護援助が対象と看護者との相互作用の上に進んでいることを実感できる学習である。相互作用を成立させ発展させるには、学生自身が対象とかかわる当事者としてその場に臨む必要がある。そこで、学生が当事者となれるような状況をつくり、機会を捉えて一歩が踏み出せるよう後押しをしたりすることは指導者の主な役割のひとつである。当事者としての体験は、学生に目的意識をもって人と関わることの実感を与える。

以下は、肢体不自由児施設で実習をした学生（古賀千晶）が実習2日目に初めて昼食の介助をした場面である。これはカードに記述された場面の1つである。「今日の昼食のメニューはNさんの大好きなチキンが入っていました。Nさんの今日の体調はあまりよくないようでしたが、夏ばてしないためにチキン、水分補給のためにお茶だけは摂取させるようにしました。チキンは私が口元までもっていきNさんが噛み切って食べました。お茶も私が口元までコップを持っていかなければならなかった。チキンの時とは違い、どれくらいずつ飲ませたらよいのかなど分からないことが多かったので、「どうしよう」と言ってとまどっていると「どうしようでは困るんだよ。明日まではNの担当だからちゃんとできないと困る」と言われ頑張らなくて、飲み終わった後「やればできるんだよ」とほめられ、とてもうれしかったし、自信もつきました。」記述された状況から、初めての食事介助の場面で学生の困った様子と介助し終えた後の達成感、そして学生を見守っているNさんの心遣いが伝わってくる。学生は担当としてその場を任されたことからどう判断し行動したらよいかを迫られ、当事者であったからこそ得られる学びをしている。この食事介助の場面に至るまでに、施設側の指導者は初期実習の段階の学生で対応できる対象者をあらかじめ選定していた。そして、実習指導教員は食事介助の前に、その日の対象者の体調とメニューからどのような食事介助を目指すのかを確認していた。さらに、食事場面にはスタッフや指導者も同席しており、その視野の中に学生が入った状態で実習が進められ、学生だけでは対応困難な場合に備えていた。このような準備の下で先の体験がなされていたのである。自然発生的な体験に委ねるのではなく、学生の学習段階と対象者の状況を考慮して双方にとって安全で効果的な体験ができるためには、施設側と教師との調整と協力が不可欠である。

6. おわりに

基礎看護実習の目的としている看護の概念形成は、看護基礎教育の全過程を通して深められていくものであ

る。さらに、卒後も経験を重ねる中で看護に関する概念の外延を広げ内包をより豊かにしていく。そこで、体験からの学び方を学ぶことが必要だと考え、基礎看護実習では現場での実習体験だけでなく体験の意味を読み取る学習も同様に重視してきた。基礎看護実習の後、学生は看護基本技術の学習を経て基礎看護実習で入院患者を受持ち、その患者の看護過程を展開する臨地実習を行なう。実習では学んだ看護実践方法論を実践に適用する体験をして、その後の学内演習で自己の看護体験から実践方法論を改めて確認する学習を行なう。学習段階にそって目標は異なるが、実践と理論との往復を繰り返しながら進めていくという教育の展開方法の骨子は同じである。

本稿では実習を立案指導した教員の立場から展開方法について論述した。看護学教育上の意義を検討するためには学生が何を学んだのかという観点から実習方法を評価する必要があり、今後の課題である。

文献

- 1) 文部省編：平成7年度わが国の文教施策 新しい大学像を求めて - 進む高等教育の改革 - 第2部第4章 第3節医学教育等の改善・充実と医療技術者の養成、1996
- 2) 駒沢伸泰、飯塚徳重、筒井秀作、川崎富夫、杉原勝子、松澤佑次、門田守人：早期臨床体験が医学生に与える影響とその意義について - 患者 - 医師関係に対する医学生のさまざまな探求も含めて -、医学教育、34(3)：193-198、2003
- 3) 庄司和晃：仮説実験授業と認識の理論 - 三段階連関理論の創造 -、季節社、1981
- 4) 沖縄県立看護大学基礎看護編：平成15年度基礎看護実習 ~実習を終えて~、2003
- 5) 川喜多二郎、牧島真一：問題解決学 KJ法ワークブック、講談社、1983
- 6) 林義樹：『ラベルワーク』のコンセプトと『ラベル図考』の普遍的な母型手続き、日本創造学会論文誌、VOL. 5：1-21、2001
- 7) 夏目みつ子、大石弘子、佐藤道子、石塚淳子：ラベル思考を用いた実習事後指導の検討 - 直接的経験を反省的経験に -、日本看護学会論文集（看護教育）、29：82-84、1998
- 8) 石塚淳子、佐藤道子、夏目みつ子：「臨床の知」を育てる臨床実習指導-ラベルワークを用いた基礎看護学実習の展開-、看護教育、42(2)：104-109、2001

The Educational Method of Early Exposure in Nursing to Promote Formation of Nursing Concept

Eiko KADEKARU, R.N., D.N.S.,¹⁾ Ayako UEHARA, R.N., M.H.S.,¹⁾

Kazue NASHIRO, R.N., M.N.S.,¹⁾ Sadako OTA, R.N., L.L.B.,¹⁾

Shinobu KINJO, R.N.,M.S.N.,¹⁾ Takano UEZU, R.N., B.N.S.,¹⁾

Yoko ASATO, R.N., M.N.S.¹⁾

This report describes the way of developing Fundamental Nursing Laboratory I. This lab is the earliest clinical practice in the curriculum and takes place after studying general ideas of nursing at the end of the first semester. The aims of this laboratory are to deepen and enlarge students' understanding of the nursing concept. The laboratory consists of a three-day practice and two-day group work to review previous experience.

In this year, practice fields are increased to 16 from 8 in order to achieve these aims. Therefore, it makes clear that nursing subjects are all people who are at any health or developmental stage.

The purposes of the two-day retrospective Session are the sharing of experiences of practice and the improvement of logical thinking. Retrospective Sessions are based on working with small groups. First of all, the students make cards by filling out their experiences of which students' have been impressed. Secondly, students think of the meaning of each card and relevance of each card. Finally all cards are shown in a structural chart. Through the whole process, it is expected that students comprehend nursing concepts by paying attention to the similarities and differences. Studying this way requires students to consider inductive and deductive reasoning. At the practice site, students can learn by stimulating the five senses, in order to secure safe by and comfort for students and patients, we should consider students readiness and the situation of patients and have to coordinate and cooperate with the teachers and the staff on site.

key words:early exposure in nursing, educational method, nursing idea, logical thinking, share experience

1) Okinawa Prefectural College of Nursing